

おもちゃコンサルタントが奨める 「おもちゃ」の選び方

福岡大学大学院工学研究科 澤村 啓美 さわむら ひろみ

子ども達は家の中にたくさんのおもちゃを持っている。そのおもちゃの多くは、押入れの中のいくつもの衣装ケースの中で眠っている。そして、小学校入学とともに、おかあさんに「遊ばないでしょ」と捨てられる。このようなおもちゃを誰が選択しているのだろうか？多くの場合買って、買ってとせがんでねだるのは子どもでもあり、その選択理由は流行やキャラクターのかわいさであろう。「おもちゃ」は子どもの成長期において重要な役割を果たすものであるが、その機能が吟味され、選択されているのであろうか？

おもちゃコンサルタントはNPO法人日本グッド・トイ委員会が認定している資格で、育児子育て、おもちゃ製作、販売業に携わるさまざまな人々が資格をとり、それぞれの立場で、おもちゃと社会の関わりを考え活動している。すなわち、優良なおもちゃや遊びをバランスよく与えることのできる“遊びの栄養士”的な存在である。

そのおもちゃコンサルタント、平野美由紀氏（Doc Spiel：福岡市南区向野2-18-1）の奨めるおもちゃの一つが木製のおもちゃの「積木」である。ただし、①表面はなめらかな白木で、面取りのしていないもの、②木尺が統一されているもの、③基本は、直方体か立方体である（基本尺：4cmもしくは4.5cm）そして④木目が細かいものがよいとのこと。

この「積木」はどんどん「積める」、子供たちは自分の手の届く高さまで積み木を積み上げることができ、さらにそれをもっと高く積み上げるため、椅子に乗

り、簡単に大人の身長まで積み上げ、「積みたい」欲求をみだす。このように子どもの知的好奇心を呼び起こすことができる。また、小学生入学までに思いっきり積んで遊び、高学年になると、積み木を通して幾何学遊びや数の概念を身につけることもできる。もちろん大人になっても、テーブルセッティングのように飾ったり、クリスマスにはツリーを作ったりして、楽しむことができる。子どもが生まれたら、その子どもと一緒に遊び、そしてその子どもは、親が積み木を大事にしている姿をみることで、もっとその積み木を大事に使いたくなる。また、子どもが成長し、遊ばなくなったら、兄弟や親戚同士で、おもちゃのお下がりをする。そんな時、おもちゃの持ち主は、一言「大事につかってね」といって渡す。

このように長く遊べるおもちゃは、廃棄されずに循環ができる。物が溢れている時代だからこそ「選び方」が必要である。まず、選ぶところから考え直してみよう。



図1
高く積み上げられた積木のオブジェ